

## ミスレンダインの闇の中心

Dungeon 誌#157 掲載“Dark Heart of Mithrendain”

<http://www.wizards.com/DnD/Article.aspx?x=dnd/duad/20080829>

参考： <http://d.hatena.ne.jp/Tirthika/20080904/p2>

作者：Greg Marks / 適正レベル：12 / 適正キャラクター数：指定なし / 公開日：2008,08,29 / 頁数：25)

エラドリンの都市ミスレンダインの聳え立つ群塔に、陽光が降り注いでいる。やわらかな風は、緑豊かな広場と整備の行き届いた道を吹き過ぎて往く。そして黄金色に輝くその姿ゆえに“秋の都”と呼ばれる年経りの集落は、平和で満ち足りた数千の暮らしを抱いている。何世紀もの間、この都市の地下深くではフォモールの深淵がじっと鎮まっていた。それを封じた大なる魔法の封印は、このエラドリンの帝国が衰退してもフォモールたちを封じ込め続けていた。永い年月を経てミスレンダインの住人たちは、この旧き暗き脅威を忘れ果て、静かな日々を呆けていた。そして都市の中心に墮落が潜み、触れるものを全て穢さんと影の中から蔓延りだしていることに気付くものは誰もいなかった。

1ヶ月前、この街の指導者の一人である評議員サフレニアは、街を治める議会に属する自分の同僚たちの間に墮落のしるしを認めるようになった。そこで彼女は調査を行なったが、そのせいで彼女はその墮落の背後に潜む闇の存在の注意を惹いてしまった。それはサフレニアがもたらした疑いが広まる前に彼女の息の根を止めるのに寸毫の気の咎めも感じないのだった。まさに暗殺が行なわれようとしているとき、このエラドリンの議員は定命の領域からやってきた英雄たちの一団と出会うのである。サフレニアとPCたちは共に闇の中に分け入り、敵を追い、また追われ、都市の命運をかけた決死の追跡劇を演ずるのである。

『ミスレンダインの闇の中心』は、12レベルのPC用のアドベンチャーである。

### 冒険の背景

ミスレンダインの街は、エラドリンの王冠に飾られた目も眩むばかりの宝石であり、その詳細についてはDragon誌#366にて紹介した（訳注：日本語版では『ドラゴン・マガジン年鑑2009』に再録予定）。この都市のもとをただせば、アンダーダークからの襲撃の脅威を封じるために建てられた古い古い砦があって、都市はその砦を取り囲むように建てられているのだ。そうしてエラドリンとの抗争で敗北を喫したという歴史に苛立つフォモールの諸王は、この都市を喉から手が出るほど手に入れたがってきた。とりわけある1体のフォモール ムサグズィという名の暴虐極まりない暴君であったのだが、長いこと“秋の都”を付け狙ってきた。そして彼は、ミスレンダインの圧倒的な守備隊と魔法の守りに正面から攻勢をかけるのではなく、もっと密かにこの街に手を伸ばすことにしたのである。

ムサグズィはジェルヴィストラという名のラミアをこの都市に送り込み、ミスレンダインを治める議会の中に腐敗を蔓延させ、彼らを自分たちの陣営に取り込むようにと命じた。このフォモールは都市の指導者層を支配することでミスレンダインを弱体化させようとしたのだ。そして最終的には封印を破壊してアンダーダークから攻め上り、この都市を破壊しつつ、と。

ジェルヴィストラは、最近ミスレンダインにやってきたばかりのエラドリンの貴族に姿

を変えた。その触れ込みを取り繕うため、彼女は街の中に贅沢な邸宅を借りたが、そこで過ごすことはほとんどなかった。ミスレンダインの中心にある砦の地下深くで、ラミアはこの都市の神秘の封印のひとつを破り、アンダーダークへと通じる道を開けてしまった。この道から彼女の注意深い計画は実現へと向かうはずなのだ。

ジェルヴィストラはぐずぐずせずに、ミスレンダインの7名の議員たちのうち4名に接近した。しかし運の悪いことに、都市の指導者層が墮落に染まったことは、サフレニア・モヴリム評議員に疑念を抱かせてしまった。彼女は静かに調査を開始し、そのことはジェルヴィストラの計画を脅かし、ラミアはこの評議員女史の脅威を取り除くために暗殺者たちを送り込まねばならないはめになった。しかし運命の糸は、サフレニアを定命の領域からやってきた英雄たちの一団のもとへと導くのである。

## 冒険の概略

PCたちは期せずしてフェイワイルドの都市ミスレンダインに行き着くことになる。そしてそこで、1人のエラドリンの議員が雇われ殺し屋どもに襲われているのに出くわす。そのエラドリン議員、サフレニアの仲間と間違われたせいで、PCたちは彼女の側に立って戦う破目になる。そして、この行動により、彼らはミスレンダインの英雄として歓迎されることになる。

サフレニアはPCたちが定命の世界に戻るためのポータルを開くことができるが、彼女はまず自分を助けてくれないかとPCたちに頼むのだ。もっとも高位の為政者たちの間に腐敗が広まっているということはすなわち、サフレニアは誰も信用できないということの意味する街の衛兵たちでさえ、彼女にとっては信用がならないのだ。彼らは彼女を反逆の疑いありとして取り調べるかもしれないのだから。PCたちはとある祝祭に“急な来賓”として参加しつつ、何人もの議員たちに会い、サフレニアの代わりに彼らの墮落の証拠をこっそりと探ることになる。

サフレニアの疑念の中心にいるのはドレシアエ・トラスリン議員といい、抜きがたい権力への志向の裏に尊大さを隠した男である。彼を通してPCたちは、ジェルヴィストラという名の謎めいた貴族の存在と、彼女が議会の面々の多くと誼を通じていることを知る。

サフレニアの抱く危惧の最大のものは、最近議会から、地下墓地内のトンネルを封鎖するようにという命令が頻発されていることである。このトンネル(天然のものもそうでないものもある)は、都市の地下を網の目のように走っているのだ。地下墓地の封鎖事業は、見た限りでは防衛強化という“良いもの”だが、その事業が何の議論も行わず強引に議会を通過したということがサフレニアの疑念のきっかけとなったのだ。

全ての議員たちと同様に、ドレシアエは公印を身につけている。それは都市の地下にある大いなる魔法の封印を解く鍵のひとつでもある。しかし今ドレシアエが身につけている封印の鍵は偽物であり、それはサフレニアの疑念よりもさらに危険な陰謀が進んでいることを暗示する。

遅かれ早かれ再度命を狙われるだろうということを恐れたサフレニアは、PCたちに「自分はこれから“<sup>オールド・バッテリー</sup>城壁跡”で人と会うので、護衛として一緒に来てほしい」と頼む。そこで彼女は若い無法者や亡命者たちの一団と会い、情報と助力を得ようというのだ。しかし、ジェルヴィストラの手下たちが会合に乱入し、攻撃をしかけてくる。そのためサフレニアとPCたちは街の地下墓地に逃げ込まざるを得なくなる。

そこでPCたちと議員女史は恐るべき事実を知る。ドレシアエの公印が鍵となっていた封印は破られ、ミスレンダインからアンダーダークへと道が通じているのだ。サフレニアとPCたちは共に古代のフォモールの洞窟へ下っていき、恐るべき脅威を潜り抜け、都市の存亡を握る、まさにそのラミアと対峙することになる。

## 冒険の導入

『ミスレンダインの闇の中心』はPCたちがゴブリンの群れを追っているところから始まり、その後彼らはフェイワイルドへと移送される。パーティー一行は様々な経緯でこの状況へと導かれることになる。

**弱きものを助ける：**PCたちの英雄的な名声は既に響き渡っており、そして彼らはその土地の農民や樵の一団から声をかけられることになる。そして「最近、村の周縁や樵のキャンプを襲うようになったゴブリンの一団を退治して欲しい」と彼らは頼むのだ。

**悪漢の罠：**PC一行はある悪漢を追っているところである。これはPCたちのそれまでの冒険の間に倒されずに逃げ延びた敵ということになるかもしれない。「件の敵がまさに今夜、ゴブリンの一団と会合を持つという情報を手に入れたのだ」と言ってきた者がいて、PCたちはそのものを先に立てて先を急いでいる。しかし件の悪漢は、自分の手下を使い、そして実はそんなことに巻き込まれているとは露知らぬゴブリンの一団を利用して、フェイワイルドへのゲートが開くとわかっている場所へとPCたちをおびき出したのだ。すべては計画通りに進み、PCたちは自分たちがフェイワイルドに迷い込んでしまったことに気付くというわけだ。すべては件の悪漢が復讐のために、あるいは彼の計画を邪魔しようのないところまでPCたちを追いやってしまうためにたくらんだこと、というわけだ。

**悪しき血脈：**PCたちはゴブリンから種族ぐるみの敵意を抱かれているか、あるいはその種のものたちとの間に長い抗争の歴史を持っているかしており、いついかなる旅の途上においてもゴブリンどもとの遭遇は起こりうる状態にある。ただ、それが悪い場所で悪い時に起こったため、PCたちがゴブリンどもを追い始めた途端、彼らはフェイワイルドへと飛ばされる破目に陥るのである。

## 冒険の結末

ジェルヴィストラとその取り巻き連を倒してしまうと、PCたちは彼女の秘密拠点を調査できるようになる。その結果、都市の地下にアンダーダークへの道を開こうという彼女の陰謀はすっかり明らかになる。PCたちとサフレニアが集めた証拠は、議員のうち誰が墮落しており、誰がミスレンダインに忠実なままであったかを十分に明らかにする。

PCたちがジェルヴィストラとその手下たちを始末してしまうと、彼らはアンダーダークの通路を歩いて何事もなく壊れた封印があった部屋に戻る。ドレシアエの公印を使えば、サフレニアは再び封印を有効なものにし、地下の洞窟へと続く通路を閉ざすことができる。

サフレニアはPCたちの立会いのもと、議会に緊急招集をかける。証拠が提示されると、墮落していた議員たち（もしドレシアエが生きていたなら、彼も含めて）は皆、罪を告白し、そして身柄を拘束されることになる。墮落した衛兵たちもまた逮捕されることになる。

PCたちがミスレンダインを離れる準備ができると、サフレニアは彼らに最後の感謝の言葉を述べ、彼らを家へと帰すゲートを開くための儀式を行なってくれる。